母を見送った季節に思うこと

今から３年前の４月。新卒で入職してちょうど１年が経った頃、私は介護休業をいただいて実家へ帰りました。末期ガンと診断された母と、最期の時間を自宅で一緒に過ごすためです。仕事柄長期休みを取ることが出来ない兄から託された想いも胸に、娘として、介護に携わる者として、自分なりに出来ることを精一杯頑張ろうと決めました。

一足先に介護休業へ入っていた父とご飯作りを手伝う祖母、時間を見つけては会いに来てくれる兄。家族５人と、往診医や訪問看護師、訪問入浴サービスの方々、その他母の親戚や友人等、様々な人が関わってくれる中、最期の２ヶ月は過ぎていきました。

時間が経つごとに、母の病状は悪くなっていきました。痛み止めの薬の量が増え、訪問看護の頻度も増えました。同時に私自身苦しむ母を見ているのが辛く、無力感や自責の念、様々な不安から精神的に苦しくなってしまうことが多々ありました。そんな時、医師や訪問看護師等の専門家にいつでも相談できる環境にあったこと、いつも変わらず丁寧な入浴やケアをする方々が近くにいてくれたこと、そして専門的非専門的を問わず様々な視点から客観的な意見をくれる周囲の人たちがいてくれたことに、とても安心を感じたことをよく覚えています。

また後日父と話をした際に聞いたのですが、当時訪問看護師さんは理学療法士である父に「専門職としてではなく、家族として側にいてあげてください」という言葉をかけてくれたのだそうです。大切な人の死を目の前にして、感情の動きや揺らぎが生まれることはごく自然なことだと思います。それを無理に抑え込まずに皆で向き合い、心を寄り添わせながら大切な時間を過ごす。それは家族であるからこそ出来る役割なのではないか。今になるとそう思います。そして本人や家族が抱えるいろいろな思いや感情と少しでも向き合いやすくなれるように、専門の技術や知識を使い本人の身体や周囲の環境を整えていくことが、看取りの場面における専門職としての役割なのかもしれないと考えるようになりました。

仕事へ復帰後、終末期に入った利用者さんに対しては、そんな役割を特に意識しながら関わるようにしています。まだまだ未熟者ですが、看取りにおける併走者として安心と信頼をよせてもらえる存在となっていければと思います。

（グループホームえん／細井美風）

イラスト／細井美風